

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19720109

研究課題名（和文） 「朝鮮資料」から見た日本語の変遷

研究課題名（英文） On a Change of Modern Japanese in Korean Materials

研究代表者

朴 真完 (PARK JINWAN)

京都産業大学・全学共通教育センター・講師

研究者番号：90441203

研究成果の概要：朝鮮通信使の日本紀行録の集大成『海行摠載』には、日本語の訓読み語について朝鮮漢語と対比した箇所があり、物の名前前の発音についても注意ぶかく観察しているため、中・近世日本語の語彙研究資料として活用することができる。また「朝鮮資料」に現れる否定文を調べた結果、「朝鮮資料」は原文と対訳文の関係が互いに影響を受けている相互依存的なものであること、また「朝鮮資料」の日本語と韓国語の中には、それぞれの言語の変遷に対応するための措置が頻繁になされていることが分かった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	150,000	1,650,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：中世日本語、近世日本語、朝鮮資料、朝鮮通信使、海行摠載、捷解新語、否定文、日本語史

1. 研究開始当初の背景

(1) 「朝鮮資料」とは、日本語の歴史的研究に有益な資料の中で「朝鮮」と関連があり、日韓対訳で記録された文献を指す。「朝鮮資料」の主なものは、日本語会話教科書『捷解新語』(原刊本 1676 年)、日本語辞書『倭語類解』(1780 年代)など、日本語に関する教科書類が中心となっている。

(2) 日本語の史的研究において独自の位置を占めている「朝鮮資料」に関する研究は、1970～90 年代前半まで、日韓両国で活発に行われたが、現在の研究は足踏み状態である。その原因として、今までの研究は主として日韓両国語で個別になされ、「朝鮮資料」の価値を生かすことができなかつたことがあげられる。その結果、日本語の歴史的な変遷の過程については不明な点が多い。

(3) 日本の「朝鮮資料」研究は、韓国語文をある程度は参照しているが、主として日本語の部分のみを対象としてきている。そのため、韓国語の影響によって生じた日本語の表現などには気づかないことが多かった。

(4) 対訳資料としての「朝鮮資料」の価値を生かすことによって、日本語史の諸問題を客観的に説明することができる。つまり「朝鮮資料」の日本語を分析するためには、中・近世日本語のみならず、古代日本語研究も視野に入れつつ、日韓両言語の歴史的な変遷に関する研究を総合的に行う必要がある。

2. 研究の目的

(1) 「朝鮮資料」は、日本語の原文に韓国語で翻訳文を付するという特殊な形式を取っているため、同資料を通して、日本語と韓国語を客観的に対照分析することができる。具体的には韓国語との比較・対照研究によって、当時の日本語の音韻・文法などをより明確に把握することができる。また「朝鮮資料」の本文はテキストの内容は変えず、日本語の変化がある箇所のみを改定しているため、日本語と韓国語の歴史、特に中・近世日本語における変化の過程を見ることができる。

(2) 本研究では日本語と韓国語との間に起こった相互影響や干渉に関する研究も行うため、現代語では説明できない文法現象も、歴史的由来をもとに説明できる。

(3) 日韓関係史の側面から「朝鮮資料」を分析すると、当時の外交交渉の様相も知ることができる。同資料には両国の外交の公式的な内容だけでなく、非公式的な側面も見ることができ、歴史資料としても重要である。また日本の官職名や地名も数多く見られ、その中にはいまだ未解決のものも多くある。これらの地名を解読することにより、朝鮮通信使(江戸時代の外交使節)の日本での行程を明らかにする。

(4) さらに朝鮮資料の分析によって、韓国における日本語教育史など、中世から近世にかけての両国の学問や文化交流の歴史も辿ることができる。

3. 研究の方法

(1) 「朝鮮資料」は対訳形式を取っているため、日本語と韓国語が切り離せない状態となっている。その結果、両言語の相互干渉が避けられず、「朝鮮資料」の言葉の中には、正常の表現と干渉を受けた表現が共存している。本研究では日本語・韓国語双方からアプローチすることによって、韓国語からの影響なども明瞭に指摘する。それによって、「朝鮮資料」の性格を明確に把握することができる。

(2) 日本語と韓国語の文法的な類似によって、「朝鮮資料」の日本語は韓国語の変遷に導かれやすくなっているのである。つまり同資料を用いる際に注意すべき、日韓語双方からの干渉が頻繁に見られる。この事実は、「朝鮮資料」が言語類型論・対照言語学という二つの分野から接近すべき資料であることを示唆している。

(3) 歴史的な観点から日本語と韓国語を比較して、その関連性を解明すると共に、共時的な立場から17世紀から18世紀にかけての両言語を各面にわたって対照する。特に依存関係にある二つの言語を歴史的に対照する際には、分析道具としての言語(韓国語)の影響を排除したうえで、日本語の変遷を分析・記述してこそ有意義となる。

(4) 日本語と韓国語の歴史的な変化を対照する際には、現代語における両国語の対照研究の成果を積極的に活用する。そのため、韓国語史と日本語史についての従来の研究を

踏まえる。従来「朝鮮資料」の分析を通して日本語の変遷と言われた内容の中、実際には韓国語の変遷から影響を受けた内容があるか見極める。

(5) 相互影響の有無を見極めるためには、両国語の中・近世(15～19世紀)における変化の諸問題を把握しておく必要がある。つまり歴史的につながりのある両言語を比較して、その関連性を解明するとともに、共時的な立場から17世紀から18世紀にかけ、両言語を各面にわたって対照するという二段階のプロセスが必要となる。

(6) 「朝鮮資料」の本文は会話体となっているため、本文の日本語は当時の口語を反映していると考えられてきた。口語資料としての性格を検討するためには、まず韓国語による仮名表記の転写システムを含んだ表記・音韻面についての検討を集中的におこなう必要がある。この研究を踏まえ、文法・語彙など全般的な問題まで進む。

4. 研究成果

(1) 「朝鮮資料」には、日本語教科書類の他、日本紀行録、対馬の外交文書類など大量な文献群が含まれており、中には未発見の資料も多い。本研究では朝鮮通信使の日本紀行録の集大成『海行總載』(韓国国立中央図書館本)を中心に、中・近世日本語に対する朝鮮通信使の観察を通じて、本書の言語的解釈を試みた。特に『海行總載』には『聞見(別・雑・総)録』と名付けられた付録が載せられている。その中には通信使一行がはじめて接した文物と、それに対応する日本語を記録した箇所がある。14世紀から18世紀までおよそ500余年間に及ぶ、以上の文献を対象に物名の漢字表記やその発音について詳しく分析した。

(2) 『海行總載』の付録をその収録した内容によって「雑制、文字、衣服、飲食、園林、畜産、その他」の部門に分けて分析した。各

文献では日本語の意味を説明するとともに、日本語に当たる朝鮮漢語を挙げている。特に朝鮮になかった職名・単位・衣服名・飲食物名・動植物名などについて細かく観察している。また一部の訓読み語についてはその発音を漢字とハングルで表記するとともに、言葉の意味についても観察していることが分かった。

(3) 「朝鮮資料」のうち『捷解新語』の改訂による原文(中・近世日本語)の語種の変化を調べてみると、1次改訂本では固有語が漢語に入れ替わる例が多く、また、一旦固有語から漢語に変わった単語については、2次改訂本までそれが維持される傾向がある。その変化に伴い対訳文(韓国語)も同じく改定される。すなわち『捷解新語』における語種改訂は、日韓両国語ともに漢語化の方向にあったことが確認できる。つまり、この語種改訂は日本語の変遷というよりは、ある目的意識、すなわち外交実務に相応しくない言葉を改まった表現に置き替えるために行われた意図的な改訂であったことが分かった。

(4) 「朝鮮資料」に現れる誤謬を言語干渉という側面から扱った。『捷解新語』の対訳文には、原文(日本語文)の逐字翻訳による表現、また原文の語順に合わせた表現が数多く存在する。このような表現は改訂を通じて、ある程度自然な韓国語へと変化していったが、否定文には依然として直されずに残されている。対訳文から見た否定文の特徴は、否定の文法形態(NEG)が用言の後に現れることが極端に多い。当時韓国語の否定文には、NEGが用言の前に現れる短形と、NEGが用言の後に現れる長形が共存しており、韓国国内文献内での出現比率はそれぞれ半分ずつ占めている。当時日本語の否定文は専らNEGが用言の後に現れることから考えると、以上の様相は、対訳文が原文の影響を受けた結果と判断される。つまり『捷解新語』対訳文を言語資料として使う際には、原文と対照しながら分析を行う必要がある。

(5) 「朝鮮資料」には朝鮮通信使や日本語通訳官たちが観察した日本語に対する生々しい証言を有している。朝鮮語との類似点・相違点についての観察を通じて、中・近世日

本語の研究、特に文法・語彙研究の資料として活用することができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 朴 真完 「朝鮮通信使の日本語観察—語彙研究資料としての《海行摠載》—」 『訪日学術研究者論文集』 14、2008、pp. 257-286 (査読なし)

② 朴 真完 「大学院国語国文学科教科課程의 韓日比較考察—高麗大学校와 京都大学の例를 中心으로」 (大学院国語国文学科教科課程の韓日比較考察—高麗大学校と京都大学の例を中心に) 「語文論集」 55 (民族語文学会)、2007、pp. 5-35 (査読あり)

[学会発表] (計3件)

① PARK JINWAN, William George Aston's collection of Hangeul materials in the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies and his method of Korean language study, The 2nd International Conference on Korean Linguistics, 2008. 8. 16, Korea University

② PARK JINWAN, *Hae-Haeng-Chong-Jae* : As a Clue to Middle-Age and Modern Japanese, The X VIII th International Congress of Linguists, 2008. 7. 25, Korea University

③ 朴 真完 「『捷解新語』の対訳方式—否定表現を中心に—」 司訳院四学の総合的研究に関する会合、2008年6月28日、青山学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朴 真完 (PARK JINWAN)
京都産業大学・全学共通教育センター・
講師
研究者番号：90441203

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者